

向老学

小番 一弘



相談に応じる筆者＝札幌市中央区

2008年10月、母親の兄がんで亡くなり、私は彼の葬儀に参列するため、東京から札幌へ戻ってきた。そこで見た母の姿は、但父の死の悲しみとはまた別な悲しきを感じさせるものだった。

誰の葬儀かわからない、お経をおける間も周囲に意味不明なことを話しかける、参列者の親族も区別がつかない。――。当時母は行蔵、認知症の発症から7年が過ぎていた。

母と同居して介護している父や弟がらは、SMSはたびたび発信されていたのだが、電話で話す母親は意外と受け答えがしつこくしていたので、この状況にはとても驚かされ、私のシヨツクは大きかった。

介護に疲れた父や弟の姿も哀れだった。母の介護を巡って頻繁に親子げんか

母と伯母の同時介護、始まる

していることお聞き、まさに家族崩壊状態と言えた。

東京へ帰る飛行機の中、私は決心した。この妻と父と弟だけに介護を押しつけてはいられない。東京での生活や仕事にけりめをつけて札幌へ戻ることに。

退職後、今後の仕事はどのようなか。仕事をしている妻はどのようなのか。そのほか、介護で札幌に戻ることを家族に受け入れてもらえるのだろうか。いろいろ悩んで不安を抱えてはいたが、理解は得られた。妻と子と自分は東京に残り、私は単身でも札幌後に札幌に戻った。もう年の瀬だった。

母の姉も独身で、札幌市内のケアハウスに住んでいた。少し認知症の症状が出てきたとして、身引受人の私に対して「転居してほしい」という声が一年前くらいから寄せられていた。

東京では情報不足で、転居先を見つけたのは容易ではなかったため、両親が住むマンションの同じ階に部屋を借り、伯母と住むことになった。

こうして、母と伯母の同時介護がスタートした。私がいかに介護を壁々として、認知症を言へてはいたが、思いつく知らされる日々の連続となった。このままでは、父や弟と同じように私も潰されてしまう。1週間足らずで、そんな絶望感を感じる精神状態に追い込まれていた。

こうかい、かすみ 1959年札幌市生まれ。慶大卒業後、会社員、自営業を経て2008年に介護のために単身で帰郷。自身の経験をもちに、情報提供・交換の場作りを開始し、設立した「札幌高齢者住まいのサポートセンター」を13年にNPO法人化。北海道男性介護者支援会の理事、事務局長も務める。